

COC+

地方創生大学等連携プロジェクト支援事業(県委託事業)

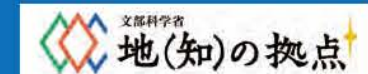
採択事業一覧



■お問い合わせは

大学等による 「おおいた創生」推進協議会

国立大学法人 大分大学 研究・社会連携部 研究・社会連携課
〒870-1192 大分県大分市大字巨野原700番地 産学官連携推進機構2階
TEL 097-554-7913・7980 FAX 097-554-6177
<http://www.bundalcoc.org/> E-mail : cocsulshn@olta-u.ac.jp



大学等による「おおいた創生」推進協議会



大分大学COC+推進機構 機構長
越智 義道

ごあいさつ

本年度、「大学等による「おおいた創生」推進協議会」では、大分県からの委託事業として、「地方創生大学等連携プロジェクト支援事業」を実施いたしました。この事業は、大学等が持つ研究開発やシンクタンク機能、さらには学生の活力を活用するなど、「知(地)の拠点」である大分県内の大学等と大分県が連携し、地方創生に向けた地域に貢献できる人材の育成や若者の地元定着を推進する事を目的としています。

今年のこの事業では、学生が地域に出向き、その地域の魅力や特徴を知ることによって地元就職や地域定着につなげる地域連携課題解決支援事業「学生による地域ブラッシュアッププログラム」と、若手社会人の知識教養を深め地域に貢献できる人材の育成を図るサテライトキャンパスおおいた支援事業「おおいたプロモーションプログラム2016」の2つの枠組みで取り組みを行いました。

「学生による地域ブラッシュアッププログラム」では8プログラムを実施し、5つの高等教育機関からのべ290名の学生が11の地域に出かけて、地域の課題解決について知恵を出し合いました。「おおいたプロモーションプログラム2016」では7プログラムを実施し、社会人・学生などのべ366名が大分の新たな魅力を発見したり、大分での暮らしをより豊かにする講座に参加しました。

この事業により、学生が地域について理解を深め、地域への関心を高め地域活性化に資する人材として成長する、また社会人が知識・教養を深め、大分を元気にする気運を高める事につながることを期待しています。平成28年度の本事業推進にあたり、ご協力、ご支援いただきました地域の皆様、関係機関の方々に、心よりお礼申し上げます。



<学生による地域ブラッシュアッププログラム2016>

学生が人々との交流を深めることにより、地域の生活文化・風景・特産品などの魅力に出会い、それを通じて地域の持つ様々な課題解決に取り組む事業です。

事業	申請大学等	事業名	申請者	実施時期	頁
A	日本文理大学	地域資源を活用した地域観光プロモーション活動プロジェクト	准教授 今西 衛	7月~1月	3
		おおいた地域創生リーダー養成講座 ~地方創生時代に活躍できる社会人を目指そう~	教授 吉村 充功	7月~12月	4
	県立芸術文化短期大学	住民参加による中心市街地の賑わいづくり -まちなか巨大絵画展示大作戦	准教授 竹内 裕二	6月~12月	5
	大分工業高等専門学校	学生による「紛争に強いまちとひとを創る」プロジェクト	講師 久保山 力也	7月~9月	6
	別府溝部学園短期大学	「野生鳥獣肉(シビエ)を活用した地域料理の開発」	准教授 直井 美津子	6月~12月	7
	大分大学	「学生がつなぐ地域と大学-おおいた防災・減災ボランティアプロジェクト2016-」	准教授 小山 拓志	12月~1月21日	8
		自治体・高校・大学連携による公共交通の利用促進プロジェクトの実施	准教授 大井 尚司	4月~1月	9
		大分観光バーチャル体験プロジェクト	教授 古家 賢一	6月~12月	10

<おおいたプロモーションプログラム2016>

大学等が連携し、若手社会人等に対して、公開講座・講義など知識教養を深める場の提供を行うことにより、仕事へのモチベーションを高めたり地域への愛着を深めてもらう事業です。

事業	申請大学等	事業名	申請者	実施時期	頁
B	日本文理大学 県立看護科学大学 県立芸術文化短期大学	「生きがいのある暮らしを創るデザインワークショップ」(3大学連携)	特任准教授 市田 秀樹 (日本文理大学)	9月~2月	11
	県立看護科学大学	「看護によるものづくりを考える」	教務学生グループ 浜松 弘一	2月	12
	県立芸術文化短期大学	You Tuber(ユーチューバー)養成初級講座 -おおいたの魅力発信!-	准教授 狩谷 新	8月~9月	13
	大分工業高等専門学校	大人のためのものづくり講座	技術専門職員 永田 玲央	8月	14
	別府溝部学園短期大学	大分の恵み再発見	教授 牧 昌生	7月~8月	15
	大分大学	おおいた森のかおりとアロマセラピー ~精油(アロマ)の魅力と体験~	教授 氏家 誠司	12月	16
		大分の地域を元気にしている 担い手訪問バスツアー	教授 岡田 正彦	11月	17



おおいた地域創生リーダー養成講座
～地方創生時代に活躍できる社会人を目指そう～

代表教員：日本文理大学 吉村 充功
学生発表者：石橋 光・城下 拓也
・斉藤 健志

1. 概要

少子高齢化が急速に進む大分県においては、主体的に行動し、課題を解決したり、新たな価値を生み出すこと、さらには多様な人的ネットワークを形成し、人口減少社会でも経済活動を活性化させ、社会を明るくできる人材の育成が急務である。

そこで、本プロジェクトでは、「まち、ひと、しごと」の観点から、それぞれの地域のリーダーとして活躍できる若手社会人『おおいた地域創生リーダー』を育成するきっかけとして、県内4地区において、学生と若手社会人の混成グループによる講座を開催した。

講座は講義+街歩き+ワークショップを1日完結型で行い、その地域固有の魅力を考える内容とした。講座の指導は文理大の教員があたり、ワークショップでは経験のある文理大学生がグループファシリテーターを務めた。参加した学生、若手社会人それぞれがその地域固有の魅力を見出す重要性を理解し、地域で主体的かつその地域にふさわしい課題解決を目指すための力を養うことを目的とした。

2. 参加者数

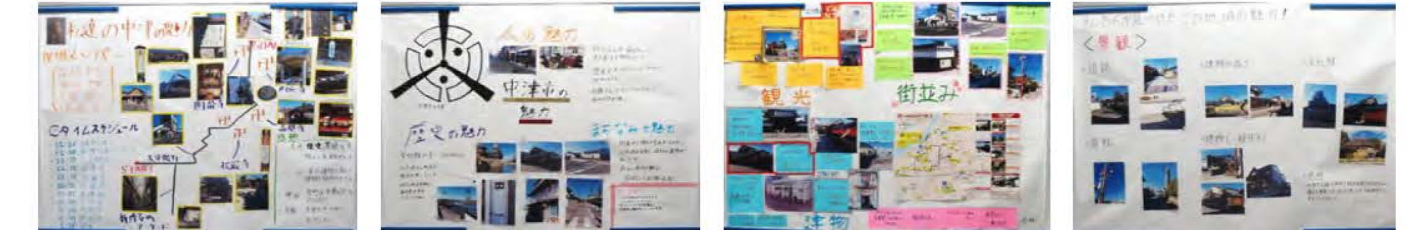
○大学生：41名/延べ46名 ○高校生：5名 ○社会人：18名
◎合計：64名/延べ69名 (17.25名/回)

3. 事業内容 (各講座の流れ)



4. 私たちが見つけた地域の魅力のまとめ

◎中津市 (諸町・寺町周辺の魅力) 開催日：12月11日(日) 会場：南部まちなみ交流館



◎大分市 (府内町の魅力) 開催日：12月17日(土) 会場：日本文理大学エクステンションセンター



◎佐伯 (城山周辺) 開催日：12月18日(日) 会場：三余館



◎日田 (豆田町) 開催日：12月23日(金・祝) 会場：豆田まちづくり歴史交流館 (旧船津歯科)



5. 大分を創る人材像における能力の自己評価の事前・事後平均の比較



6. まとめ

地方創生を切り口に、これからの人口減少・少子高齢社会で必要な考え方を身につける学習機会を提供することで、学生と若手社会人、双方の地域創生に対する意識向上ならびにまち歩きやワークショップを通じたその地域固有の魅力の発見につながった。

また、県内金融機関や中小企業家同友会と連携し、県内4地区で実施することで、県内全体での人材育成の底上げの可能性を示すことができた。さらに、各地区で学生と若手社会人が一緒に学ぶことで人的ネットワークができ、学生に対しては、将来の地域での就職に対する魅力向上につながった。

講座参加者のアンケート結果は、全体的に好評であり、本事業の目的である大分を創る人材像における能力に対する理解も深まっており、所期の目的は達成できたと考えられる。

なお、今回はその地域の魅力をしっかりと発見することを重視している。そのため、次年度以降も継続していく場合は、複数日開催にして実際の課題解決への取組に展開させる必要がある。また、本事業の目的の一つとして、県内各地での実施を想定していることから、今後は県内各市町村での開催も検討する必要がある。

<学生による地域ブラッシュアッププログラム2016>

<学生による地域ブラッシュアッププログラム2016>



住民参加による中心市街地の賑わいづくり — まちなか巨大絵画展示大作戦 — (報告)

大分県立芸術文化短期大学 情報コミュニケーション学科
 ○プロジェクト体制：竹内裕二・安倍尚紀・後藤まりあ
 ○連携企業：大分中央通り会、三井住友銀行 大分支店
 ○対象者及び参加学生：市民・延べ約3万人、学生・30人

□ プロジェクトの目的
 大分市の中心市街地の活性化には、市民が街

に来街してもらうための目的づくりが求められる。これまで活性化活動は、市民目線ではなく、商店主目線による取り組みが多い。そこで、本プロジェクトの目的は、本企画関係者（産官学民協働体）一同から銀行を市民へクリスマスプレゼントとして届けることである。



□ 事業計画

○企画名：気持ちですが、あなたへのプレゼント「銀行」を見て下さい！

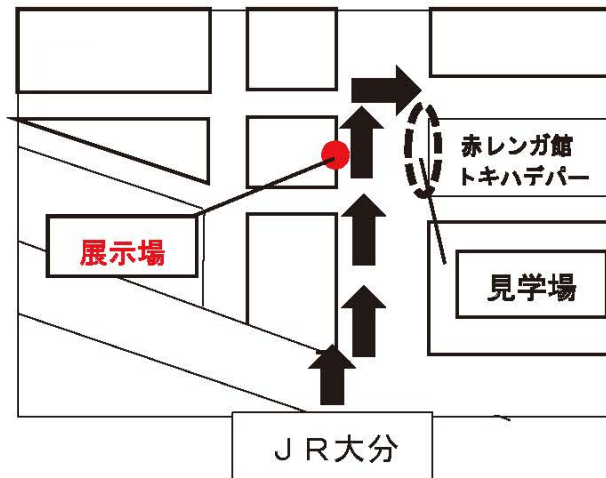
○展示場所：三井住友銀行 大分支店
 ○準備期間：8月1日～11月26日
 ○展示期間：29日間／11月27日～12月25日
 【設営・撤収は、開催期間前後1日づつ】

※1）市民参加によるモザイクアート（縦4.5m×横3.5m）を切手に仕立て展示し、銀行の建物をリボンでラッピングする。

□ 期待する事業成果

今回の取り組みにより、地域活性化事業に関わりたいと考えている人々に対し、活性化の取り組みに関与してもらおう仕組みを提供することができた。さらには、市民に対して、中心市街地に来街する目的を創出した。その上で、今回の支援の達成度については、次のような結論を得ることができた。

【支援事業が示すステップ1】本企画に対する新組織を結成し、学生による内部交流を図った上で学生組織による地域への参加の働き掛けを行うことができた。【支援事業が示すステップ2】本取り組みが、地域にとっての価値を見出してもらうように働き掛けを行い、本取り組みへの参加を促すことができた。【支援事業が示すステップ3-4】目的づくりのための住民参加による作品作成ができ、本取り組み課題となる住民の大分中心市街地へ来街するための目的を創出することができた。アンケート結果からも大人は、このような行事を行うことで、いつもより中心市街地に関心を持つことがわかった。



紛争に強い街づくり

久保山力也・橋本恭平・船越啓樹・荒野正太・吉田知世
 大分工業高等専門学校

【概要】

今日、日本には多くの外国人が訪れている。2016年の訪日外国人の総数は約2400万人であり、去年初めて2000万人を突破した。東日本大震災の起こった2011年を除けば、2010年から2016年末まで訪日外国人の伸び率は毎年約20～40%増となっている(出典：日本政府観光局)。また、日本には約230万人もの外国人が暮らしており(出典：法務省)、私たちの地元である大分県は2015年度人口10万人当たりの外国人留学生数が288.6人で日本一であった(出典：大分県)。このように日本でもグローバル化が進む中で外国人と日本人とのトラブルも増えている。私たちはこの外国人と日本人のトラブルのない社会の構成のことを「紛争に強い街」と定義し、紛争に強い街の実現について議論した。

紛争に強い街づくりの目標

- 日本人が外国人の目線になって考え、考え方の違いについて理解してもらう
- 外国との文化や宗教の違いからくるトラブルを知ってもらう

実現のために

- 小・中学生にターゲットを絞り、できるだけ楽しみながら、外国人に対する理解を深めてもらう

実際のトラブル事例はどんなものか APUで聞き込み + 司法書士の方と話し合い



実際のトラブル(紛争)事例

- バイトが大変（宗教的な慣習を理解してくれないなど）
- 印鑑の重要性が理解できない
- ごみの分別が細かい
- 結婚や離婚の手続きが難しい
- 学んだ日本語と現地の日本語とのギャップ
- アパートを借りたいが保証人がいない
- 正座の文化がないので苦手
- 宗教が原因で危険人物扱いされる

得られた事例をもとにボードゲームを製作

製作したボードゲーム



- マス目に実際の紛争事例を取り入れ、来日した外国人を疑似体験する
- 実際に近いトラブルなので理解が深まりやすい

まとめ

紛争に強い街づくりプロジェクト

- 紛争×教育×遊び → 「楽しく学ぶ」から単に「楽しいから遊ぶ」への転換
- 翻って、従来の教育へのインパクト

ゲーム体験

紛争解決に関する「見方」、「とらえ方」などが変化→

紛争領域に強い市民の育成をはかることができる

<学生による地域ブラッシュアッププログラム2016>

野生鳥獣肉（ジビエ）を活用した地域料理の開発 別府溝部学園短期大学 食物栄養学科

概要（要旨）

- 背景: 全国的に野生鳥獣(主にイノシシやシカ)による農作物の被害が拡大しており、その多くは捕獲され、埋設や焼却によって処分されている。
- 目的: 本事業では、野生鳥獣肉(ジビエ)を活用した地域料理の開発を通して、野生鳥獣の食用利活用を推進することを目的とした。
- 内容: 本事業では、野生鳥獣肉(ジビエ)を活用した地域料理として、ジビエラーメン、猪ワンタンスープ、ジビエベーコンを開発した。
- 連携企業・自治体: 豚骨ユニバーシティ濃厚学部、和風創作Dining KIRARA、大分ラ麵s倶楽部、株式会社杜精製屋、株式会社LD&K、大分県農林水産祭実行委員会事務局、別府市ONSENアカデミア実行委員会



事業内容

ジビエラーメン

- 開発: 連携企業と協同して試作・試食会を実施した。(2016年6月16日、7月11日、8月17日)
- 販売: 第2回大分ラ麵sフェス
日時: 2016年9月3日(大分いこの道 北側広場)
日時: 2016年9月10・11日(別府北浜公園)
食の大宴会@別府2016
日時: 2016年11月5・6日(別府公園)

ジビエワンタンスープ

- 調査: ジビエ認知度調査(2016年6月~10月) ジビエ嗜好調査(2016年7月)
- 試作: ジビエ料理講習会(2016年9月30日)
- 販売: おおいたみのリフェスタ
日時: 2016年10月15・16日(別府公園)
食の大宴会@別府2016
日時: 2016年11月5・6日(別府公園)

ジビエベーコン

- レシピ開発: 連携企業と協同してレシピを開発した。3つのレシピ(A・B・C)
- ベーコンの試作: 連携企業と協同してベーコンを試作した。(2016年8月)
- 調査: ベーコンの嗜好型官能評価を実施した。(2016年10月~11月)
※ジビエベーコンは、開発途中である。

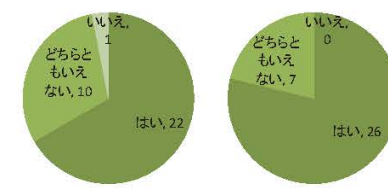


結果（状況）

ジビエラーメン

- 販売実績:
第2回大分ラ麵sフェス
270杯 (2016年9月3日) 価格500円
860杯 (2016年9月10・11日) 価格500円
食の大宴会@別府2016
560杯 (2016年11月5・6日) 価格500円

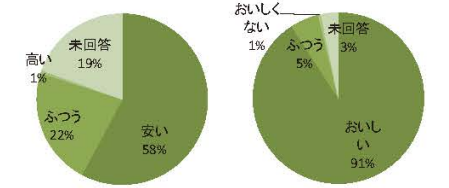
- イベント参加学生に対する意識調査
Q. 野生鳥獣(ジビエ)を食用として活用することの有用性を感じた。衛生管理について理解できた。



ジビエワンタンスープ

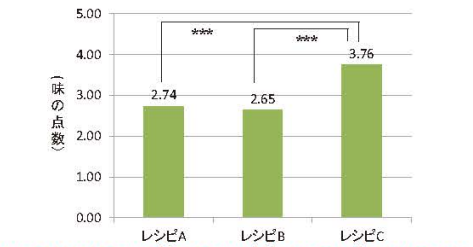
- 販売実績:
おおいたみのリフェスタ
260杯 (2016年10月15・16日) 価格250円
※売上10%を平成28年熊本地震義援金に寄付。
食の大宴会@別府2016
169杯 (2016年11月5・6日) 価格200円

- ジビエワンタンスープに対する評価
Q. ジビエワンタンスープの価格はいかがですか?
Q. ジビエワンタンスープの味はいかがですか?



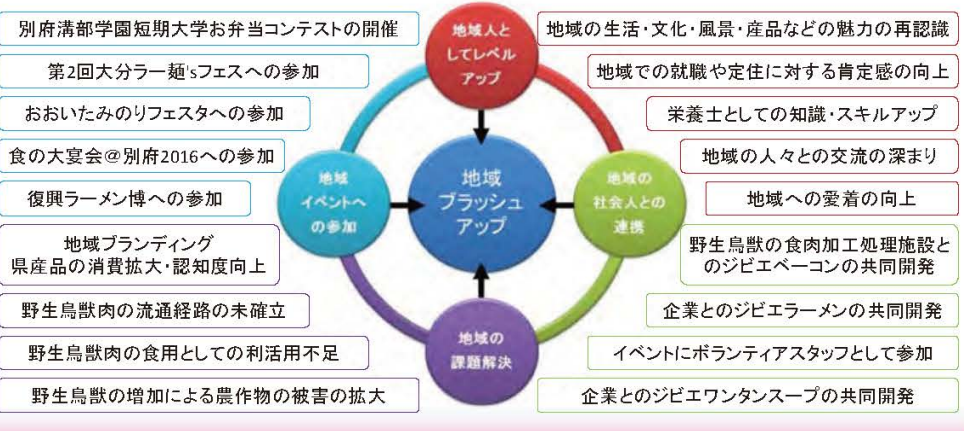
ジビエベーコン

- ジビエベーコンの嗜好型官能評価:
評価項目: 見た目、におい、食感、味の4項目
評価方法: とても好ましい(5点)、好ましい(4点)、どちらともいえない(3点)、好ましくない(2点)、とても好ましくない(1点)の5段階評価
分析方法: 一元配置分散分析(IBM SPSS Statistics 21)
結果: 3つのレシピ(A・B・C)について嗜好の差異を検討した結果、「味」において有意差が見られた。



まとめ

- 地域の社会人との連携して商品開発を行うという経験を通して、学生は地域社会で活躍する人材として成長するための知識や技術を学ぶことができた。
- 学生が地域イベントに参加することによって、地域の活性化に寄与することができた。
- ジビエを活用した地域料理を開発し販売することによって、ジビエを地域資源として有効活用することができ、地域の課題解決に貢献することができた。
- 学生は、地域の生活・文化・風景・産品などにふれ、地域の魅力を再確認することによって、地域人としてレベルアップすることができた。また、地域への愛着が向上し、地域での就職や定住に対する肯定感が向上した。
- ジビエベーコンが未完成であるので、引き続き、活動を継続させていこうと考えている。
- 本学では今後も地域の活性化に貢献できるように、学生と教員が丸となって地域と関わっていこうと考えている。



<学生による地域ブラッシュアッププログラム2016>



学生がつなぐ地域と大学 —おおいた防災・減災ボランティアプロジェクト—

北野孔亮・河野綾(大分大学教育福祉科学部学校教育課程教科教育コース技術選修)・岩本由起子(教育学部学校教育教員養成課程小学校教育コース)
教員代表: 小山拓志(大分大学教育学部地理学教室)

概要

本プロジェクトは、第一に学生のボランティアを通じて、地域の防災・減災力の向上に寄与すること、第二に自然災害や防災・減災に関する知識、あるいはそれに関連した技術を習得すること、第三に地域課題に向き合い、実践的に取り組む人材の養成に貢献することを目的とした。具体的な活動内容は以下の通りである。

① 敷戸団地の公民館や商店街の空き店舗を活用し、本学教育学部の学生が考えた防災・減災に関するブース(教室)において、地域の方々や学生が共に学ぶというイベントを実施した。

② 学生が自力での対策が困難な世帯を対象に、家具の移動や転倒防止金具等の取付けを行うボランティアを実施した。

本イベントでは、地域住民の防災・減災対策、あるいは防災・減災意識の向上に寄与できただけでなく、商店街の空き店舗を活用したことで、地域の活性化の一助になったと考えられる。

★プロジェクト終了後は、3年連続で北野大分大学長名入りの修了証を、参加学生に授与した。

事業内容

全体のプログラムについては、表1の計画に沿って行っていた。まずは、学生代表等を決め、基本的には学生が主体となり司会進行を行った。次に、大学近隣の地域に対してどのような防災・減災ボランティアを行うことができるのかを話し合い、公民館や空き店舗を使った防災・減災に関するブース発表、そして、実際に地域の方々の自宅へ向けて、家具固定のボランティアを行うことに決定した。その後は、ブース発表に向けて各選修ごとに分かれて、防災・減災に関連したどんな内容を発表するのかを話し合い、社会科は、「地震が発生したら、一体どうなるか」ということ、生活科は、「避難経路や避難の仕方」について、技術科は、「家具固定」について発表することに決定した。最後は、ブース発表の結果を踏まえて、実際に地域の方々の自宅へ行き、家具固定を行った。

日時	場所	主な内容
第1回 12月7日	学内	概要確認・代表者決定
第2回 12月14日	学内	ボランティア内容の決定・ブース分け
第3回 1月11日	学内	ブースごとに制作
第4回 1月18日	学内	ブースごとに発表&確認
第5回 1月21日	現地	現地で発表
第6回 1月25日	現地	現地で家具固定
第7回 2月1日	学内	全体の反省・修了証交付
練習日 1月16・17日	学内	電動ドライバーの練習



プロジェクトおよびイベントの結果:「しきど団地で学ぶ!防災・減災」&「家具固定ボランティア」

【技術ブース】

技術ブースでは、公民館の二階にて、「家具固定体験教室」を行った。最初の十分ほどは、パワーポイントを使って家具固定の意味や注意点、必要な道具などについて説明を行った。その後、参加者の方々が見やすいように同じ部屋で壁際にブルーシートを敷いておき、その上で、用意していた柱を固定した板と、小さな木製の本棚を、電動ドライバーとねじを使って固定する作業を行った。一度、パワーポイントで説明したということもあり、実際に家具固定の方法を実技を交えて行うと、とても興味を持ってもらえたようだった。また、このブースを見て後日に行う家具固定の参加を、より促すことができた。

【地理ブース】

社会ブースでは、空き店舗を用い、「地震が発生したらどうなる?クイズとiPadで体験してみよう」というテーマで発表を行った。クリッカーを使った防災クイズやiPadと車を合わせた地震体験、南海トラフ巨大地震の発生する予測、敷戸団地周辺の危険箇所と防災情報の入手方法など、写真やハザードマップを用いて説明し、敷戸の方々には、クイズや地震体験に積極的に参加してもらった。敷戸の危険箇所を取り上げた時や防災情報の入手方法の説明の時はメモをとっていた方もおり、これらから、敷戸という身近な場所にも危険が潜んでいること、防災情報を手に入れて災害に備えることが大切であることを伝えることができた。

【生活ブース】

生活ブースでは、「避難の仕方を学ぼう」をテーマで発表を行った。家庭内での家具の配置や避難経路の確認、簡単にできる耐震改修や水害・火災への対策まで幅広くプレゼンを行った。また、大分大学オリジナルの減災かるたを使用して、楽しみながら地域の方々や交流できるブースとして活用できていた。その他にも、防災・減災に関するポスターを貼って細かい説明を行ったり、空いたスペースなどを活用して、避難持ち出し袋や簡易トイレなど、手軽にできる防災対策を呼びかけたりした。地域の方々の中には、「聞きたい情報が聞けて満足した。」と喜んでくださった方もおり、ニーズのある発表で、防災・減災に関する意識を高めることができた。



グラフは防災意識が高まったかどうかに関するアンケート調査の結果
紫: とても高まった 青: 高まった 緑: どちらでもない 白: あまりたがまらなかつた 橙: 高まらなかつた

【家具固定】

5日後に、メンバーを3つに分けて、先日に家具固定をして欲しいという家庭9軒で、家具固定ボランティアを行った。壁や家具を傷つけない箇所はつっぱり棒で、確実に固定したい箇所は金具で固定を行った。家庭によって固定箇所や固定方法に違いはあったが、無事に家を回る事ができ、地域の方々にも喜んでもらったので、より密接に地域に関わることができた。

まとめ

今回は、準備期間などを含めておよそ2ヶ月にわたってボランティア活動を行ってきた。この活動を通して、地域に対して密接に関わることが出来たというのはもちろんであるが、自分たちでテーマを決めて調べたり、学生同士、教授、地域の方々や密に連絡を取り合いながら何かを実現していくという経験は、将来教師を志す人間としてとても貴重であった。今後もこのような形で活動できるかはわからないが、機会があれば何らかの形で関わりたい。

<学生による地域ブラッシュアッププログラム2016>

自治体・高校・大学連携による公共交通の利用促進プロジェクトの実施
 大分大学経済学部交通論研究室（指導教員：大井尚司）、豊後大野市まちづくり推進課、大分県立三重総合高校メディア科学科（協力）大野竹田バス（株）、豊後大野市タクシー協会、大分県企画振興部観光・地域局交通政策課、大分航空ターミナル（株）

1. 背景と目的



求められる策とは？

- 生活（日常）交通の確保・維持・改善には？ = 『大人の社会見学』事業による「きっかけ・体制づくり」
 - 『地域主導』の維持体制の構築 = 自治体・地元の若者を巻き込む ⇒ 外出支援、生活支援、地域活性化
- 外来客（観光客）の利用可能な交通体系とは？：地元だけでも無理がある
 - 外来客のニーズ調査 = 外来客を地方に引き込むための望ましい交通体系の把握 ⇒ 観光による活性化

2. プロジェクトの内容



3. プロジェクトの成果と考察

①生活（日常）交通の確保・維持・改善

- 自宅から乗合タクシー・バスを利用（学生添乗、料金支払いも含め体験）
- 買い物支援、健康講話（公共交通利用の効果）、食事も、ゲーム実施（おでかけの目的づくり=内容を高校生と大学生で企画、運営も実施）
- 高校生と大学生の組で自宅聞き取り（移動実態、生活実態の把握）

⇒公共交通への認識は変わるか？
 +高校生の地域に対する意識は？

イベントの評価は高い、ただ参加者層に課題も

- きっかけは必須=「コミュニティ」のための移動、は重要
- 引き出した層の参加が皆無=「世話になる」ことへの抵抗

公共交通の必要性・意識が弱い

- 「身内依存」「自己調達」=このままでは維持は難しい？

高校生（地元）の巻き込み方

- コミュニティ形成の「接着剤」に期待⇨郷土愛の低下という課題も

②外来客（観光客）の利用可能な交通とは

利用手段：レンタカーが多い
 回遊範囲はレンタカーが広い

では、車での観光には問題はない？

- 運転への不安材料は存在（霧の多さ、道の狭さ、案内）
- 観光回遊への支障（豊肥圏の酒蔵等=運転手は満腹できない）
- 公共交通は「不便」と思い込み（PR不足、基礎情報の認知度の低さ）

⇒公共交通が「使える」PR + 回遊ルート、周遊バス等の提供 + レンタカーとの「共存」

豊肥圏へも観光（地域の魅力に触れられる）交通手段を

4. 提言

- 生活交通の維持**
 地元を巻き込み「コミュニティ」形成の場に日々の利用を地域で醸成、地域を「いきいき」ときっかけづくりとしての若者・大学の活用
- 非日常（観光）交通の確保**
 豊後大野などの豊肥圏へも人呼び込み多くの観光資源を回遊できる公共交通の確保
 回遊バス、レンタカーとの共存体制構築、情報提供
- 公共交通の活用・活性化で地域活性化！**

<学生による地域ブラッシュアッププログラム2016>



大分観光バーチャル体験プロジェクト (VRのデモがありますので是非、体験して下さい！)

大分大学 大学院 知能情報科システムコース
 尾崎雄大
 工学部 知能情報システム工学科
 濱口純花、園部悠菜、山中雄太、佐渡亮太、堀江宥仁



概要

- 様々な分野からVR技術に注目が集まっている
- VR(バーチャルリアリティ):人間の感覚器官に働きかけ、現実ではないが実質的に現実のように感じられる環境を人工的に作り出す技術の総称
- 近年、VR技術が手軽に体験できるようになった
 - 例) PlayStation® VR、VRお化け屋敷、youtube
- 20代~60代までの男女1,207名を対象にVRに関する調査を行った中で最も体験したいVRコンテンツは「観光」であるという結果が発表された(株式会社Viibar調査、2016)



目的
 VR + 観光 + 大分

大分大学でのVR技術の研究を生かして大分県竹田市の観光スポットを対象とした大分観光バーチャル体験コンテンツの作成

竹田市地元企業、自治体との意見交換

まちづくりたけた株式会社アグル様との話し合いの際に出た意見

- 今までの媒体では伝わらないものを伝えたい
- 竹田ならではの音を撮りたい(城下町の水路、湧水)
- 隠れた店の紹介
- 観光の対象はどうするのか

竹田観光ツーリズム協会様との話し合い

- 動画を見て来たくするような工夫
- 音がないところはナレーションを入れてストーリー風にする
- 観光客の声も入れてみてはどうか
- できた動画を観光アプリに使えないか

撮影に関して気付いた点

- 録音録画のタイミングを合わせる
- 撮影者が写らないように配慮する
- カメラの方向と音の方向を決めておく
- 夜に比べ昼には音がなかった
- 遠隔で録音する際遮蔽物があるとモニターできない
- 長時間のためRICOHの電池が切れる
- 夜に撮影する際、暗すぎて何が写っているかわからない場所には明かりをつけて撮影する
- 竹楽の夜には人が多く撮影が困難になる場所があった

VR撮影機材

全地球映像用カメラRICOH THETA
 スマートフォンでの遠隔操作にて録画を行う。
 立体音響用マイクロホンアレイ(試作)
 360度集音用に作成した
 8チャンネルマイクロホン

VRコンテンツ編集・HPイメージ作成

- 映像と音声の同期
- 必要な場面の抽出
- Youtube用VR動画への変換



竹楽(祭り)の時期の観光スポットの撮影



今後の進め方

- 8チャンネルで集音した音を編集し立体的な音を作成する
- 竹田ツーリズム協会様のHP「タケタン！」に観光体験VR動画を掲載できないか相談する
- 意見交換でもらった意見をコンテンツに反映する

<おおいたプロモーションプログラム2016>

<おおいたプロモーションプログラム2016>



生きがいのある暮らしを創る デザインワークショップ

Happiness Long Life Open-innovation Workshop

「ヒト」の暮らしは、「モノ」に支えられ、豊かになってきました。しかし、今、人口減少や超高齢化社会、資源の減少や環境の変化など、「ヒト」の暮らしを取り巻く社会の劇的な変化の中では、「ヒト」と「モノ」の関係性を捉えなおす時が来ています。
「生きがいのある暮らしを創るデザインワークショップ」では、超高齢化社会における暮らしの向上を目指して、それを実現するために必要な「モノ」について、多様な背景を持つ人々が集まり、ダイアログを通して、その可能性と「ものづくり」にチャレンジするワークショップです。

日本文理大学 工学部 特任准教授 市田秀樹
日本文理大学 工学部 教授 池田真人
大分県立芸術文化短期大学 講師 松本康史
大分県立看護科学大学 教授 影山隆之
大分県立看護科学大学 教授 濱中良志
大分県立看護科学大学 准教授 伊東朋子
大分県立看護科学大学 助教 樋口幸
大分県立看護科学大学 助教 政生博康
社会医療法人敬和会 大分東部病院 森野一
社会医療法人敬和会 大分東部病院 衛藤恵美

<連携>
大分県医療ロボット・機器産業協議会
シェルエレクトロニクス株式会社



事業目的

医療・介護施設、医療機器産業関係者の人材育成を図るとともに、産官学連携による看護の視点からのモノづくりの取組を加速するため、大分県医療ロボット・機器産業協議会との共催によりフォーラムを開催する。

事業概要

日時 平成28年12月18日(日) 14:00~16:50
場所 大分県看護研修会館「大研修室」(大分市大字豊橋310-4)
参加者 医療・介護施設、ものづくり企業、大学、行政関係者等 106名



プログラム

開会行事 大分県立看護科学大学長 村嶋幸代による開会挨拶及び来賓挨拶
講演

司会: 大分県立看護科学大学 学部長 藤内美保
演題: 看護学におけるイノベーション - 療養生活支援とモノづくり -
講師: 真田弘美氏 (東京大学大学院医学系研究科 老年看護学・創傷看護学分野教授)

主な講演内容及び提言等

- ・日本を取り巻く看護の現状と課題 vs 海外では福祉器具カタログにハッピーな高齢者の写真をよく見る
- ・便利なものがなければ作ってしまおう、という発想が必要
- ・人間にはできないが機械ならできると、機械がやれば速い/テラーメイドにできる看護・介護
- ・看護の視点からの看護機器開発の取組や手法
- ・看護理工学会の創設
- ・実績を企業に示すこと/企業に現場を見てもらうことが重要

事例報告及び意見交換

司会: 大分県立看護科学大学 看護研究交流センター長 影山隆之
発表者: 大分県立看護科学大学 看護研究交流センター 助手 平井和明
大分県立病院 看護師長 小畑絹代
徳器技研工業株式会社 代表取締役 徳永修一
シェルエレクトロニクス株式会社 代表取締役社長 森竹隆広
大分県商工労働部産業集積推進室 副主幹 秋吉良継



主な内容

- ・産官学医民連携によるワークショップ(Hallow)の取組事例について報告~異分野の参加者から刺激を受けた!
- ・病院内で機器開発ニーズの聞き取り調査~いままでの看護になかった発想を拓かれた!
- ・看護関連機器開発の取組や医工連携における課題等について意見発表
- ・県の産官学連携支援施策、補助制度等について説明



講師からのコメント

- ・看護機器の製品化を進めるうえでは販路開拓が重要
- ・学にフルタイムで専門に産官学連携を担当する者の配置が必要
- ・大学教員は論文をしっかりと作って企業に見せること
- ・看護現場での知的財産の管理・取扱いに十分注意すること

参加者からの質問・意見及び関係者コメント

- ・時間的制約があるなかで医療現場でのデータ取得、分析の工夫→ターゲットの絞り込み、大学研究者の活用
- ・県内医療・福祉機器製造企業とのマッチング手法→県機器開発コーディネーターの活用、大学相談窓口の活用

閉会行事

大分県医療ロボット・機器産業協議会 丸井彰会長による閉会挨拶

参加者の感想

- ・講演に刺激を受け、前向きになった。
- ・看護の視点からのモノづくりのプロセスを学んだ。
- ・ものづくり企業が協力できることを理解した。

参加者の要望

- ・医療現場の具体的なニーズの情報を知りたい。
- ・連携を進めるうえで、どのような工夫が必要か知りたい。

事業成果、今後の展開

- ・看護関連機器開発の具体的な取組や手法について、関係者の知識・理解が深まった。
- ・大分県医療ロボット・機器産業協議会(大分県商工労働部所管)に「看護関連機器開発部会」が設立され、本フォーラムがキックオフイベントとして位置付けられる等、看護とものづくり企業、行政の連携強化のきっかけとなった。
- ・看護学とものづくりの連携を通じた産業振興による地域活性化が期待できる。

おおいたプロモーションプログラム You Tuber 養成講座 (初級)

大分県立芸術文化短期大学 情報コミュニケーション学科 准教授 狩谷 新



1. プロジェクト体制

(1) 講師・指導者等一覧表

大分県立芸術文化短期大学 映像メディアゼミ 担当 狩谷 新

大分県教育チャンネル 制作担当者 鴨下由紀 (元テレビ番組プロデューサー)



2 利用施設・共同参画企業等の名称

大分県立芸術文化短期大学 人文棟3階メディア演習室



3. 対象者及び人数 (予定)

2回完結の講習 (1回90分) 受講生 20名 を2回実施 述べ40名

二回目の講義の後、懇親会を設け、講師・受講生・観光関係者との交流を図る。

4. プロジェクト事業の目的

- ① 県内観光スポット及び投稿者の発見した新たな魅力をどのように動画で撮影し、編集するか、及びネットへのアップの仕方を習得させる。
- ② 動画作成時の著作権や肖像権に関する知識を身につける。
- ③ 公開に適さないものを例示し、過去の失敗例を知る。



5. プロジェクト事業計画

夏休みの前後で受講生を募集し、8月の第一週及び9月最終週の平日18時からの講座を各二回開催する

6. 期待する事業成果

現在スマホの動画機能は、ビデオカメラの性能を上回っており、その意味で、スマホ利用者がほとんどすべて本事業の対象者となるが、その中で特に動画制作に興味のある者を対象とする。受講生が、夏休み及び秋の様々なイベント取材し、大分県の魅力を独自もしくは、県の動画サイトへ投稿する形で、発信、より多くの方に県の特徴を知って頂くことによる観光促進。



7. 講義内容

- 一駒目は YouTubeへの投稿の仕方を具体的に指示し、教室のパソコンから、実際にアカウント作成を行ってもらいその後、大分県教育チャンネルで総再生回数150万回を記録した鴨下由紀講師から、再生回数を上げるためのポイントを講義していただき、著作権等の注意点も指摘した。
- 二駒目では、必要な機材、編集ソフトなどについて具体的に提示、動画としてどのような魅力を与えるべきかを具体的に提示した。



8. 成果

第一回は7月22日及び29日金曜日 午後6時30から8時まで開講

夏休み前の学生を主な対象とし、開講20名の参加者を得た。

第二回は9月30日及び10月7日金曜日 同時刻で開講

事前に大分合同新聞への告知広告をした結果、社会人26名が参加した。



今回の講座は入門編であり、撮影方法や編集方法については、本学で別の公開講座もあり、参加者の内何名かはそちらにも参加している。

大人のためのものづくり講座

大分工業高等専門学校 技術部 永田 玲央

概要

大分県は、工業分野・医療分野等、様々な分野における企業が数多くあり、多くの製品を世に送り出している「ものづくり県」です。しかし、日頃から「ものづくり県」大分を意識して過ごしている大分県民は、あまり多くないのではないかと考えられます。また、日々の生活の中で、「ものづくり」を楽しんでいる県民はほとんどいないのではないのでしょうか。

そこで、本講座では、以下の3つを目的にArduinoやGPS等を利用した時計の製作を行いました。

1. 「ものづくり」の楽しさを体験するとともに大分県民の「ものづくり魂」を刺激したい
2. 「ものづくり県」大分としての魅力を再認識してもらいたい
3. 大分県民の自己研鑽に貢献したい

事業内容

表1に本講座の詳細を示します。本講座では、主にArduino (図1) とGPSモジュール、LCDモジュール (図2) を用いたGPS時計の製作を行いました。講座初日にArduinoについてや、GPSの原理や活用事例等について簡単な説明を行って、GPS時計の製作を行うことで講座としての深みをもたせました。

表1 「大人のためのものづくり講座」詳細

8月8日 (月) 18:00~20:00	8月9日 (火) 18:00~20:00	8月10日 (水) 18:00~20:00
ArduinoやGPSの簡単な説明 (0.5h) 基板製作 (パーツの確認、はんだ付け) (1.5h)	Arduino IDE (プログラム開発環境) の説明 (0.5h) プログラム作成 (時刻情報取得、曜日算出、LCD表示等) (1.8h)	プログラム作成および動作確認 (2.0h)



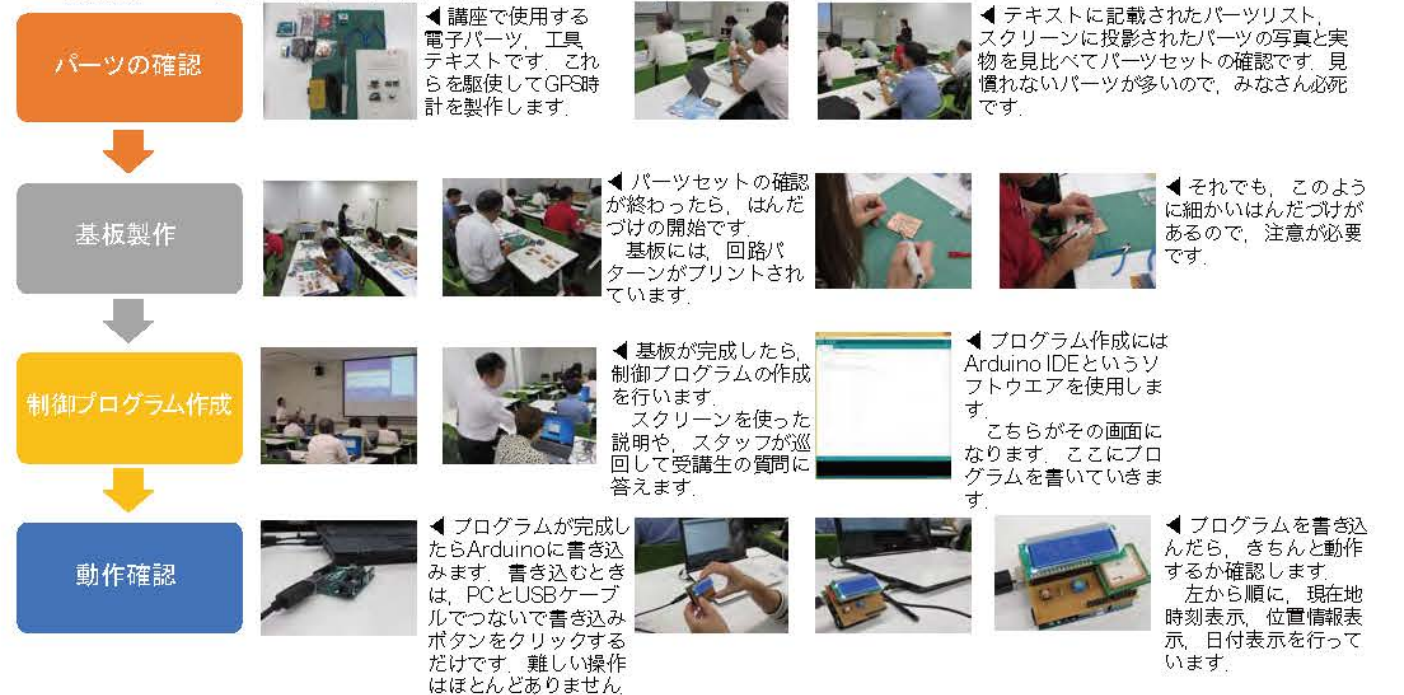
図1 Arduino



図2 製作する基板

結果

本講座は、以下に示す4つのステップで実施しました。各ステップにおける講座の状況を写真と簡単な説明で示します。時間が足りなかったため、動作確認まで終了することができた受講生は約半数ほどでした。動作確認まで終了できなかった受講生には、あらかじめ動作確認済みのプログラムを配布して、動作の確認をしてもらいました。



まとめ

本講座は、GPS時計の製作を通して、基板製作からプログラム作成までのものづくりを体験する内容でした。講座終了後にアンケートを実施したところ、図3に示すように本講座の満足度は100%でした。また、アンケートの他の項目でも、「面白い内容だった」、「ものづくりの楽しさに触れることができた」等、講座に対して好印象な内容が目立ちました。このことから、本講座の3つの目的のうち、目的1と3は達成することができたといえます。さらに、アンケートには、「いろいろとやってみよう」、「詳しく調べようと思う」という記述もあり、受講生への「ものづくり」に対するきっかけづくりができました。あわせて、本講座での基板製作を通して、受講生がはんだづけを含む基板製作技術の基礎を習得することに貢献できました。

一方、今回の講座では、時間的な制約や準備不足であったこともあり、プログラミングについてしっかりと内容で実施できませんでした。今後は、受講生のプログラミングやタイピング等のレベルを考慮して、時間的な余裕をもたせるような内容を検討する必要があります。

目的2については、残念ながら達成できなかったとはいえません。その理由として、講座の内容に「大分県を再認識できるような内容」をうまく組み込むことができなかったことが挙げられます。今後、少しでも目的2を達成することができるよう内容を検討する必要があります。

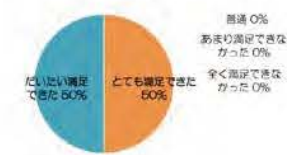


図3 本講座の満足度

<おおいたプロモーションプログラム2016>

大分の恵み再発見 ～五感が喜ぶ、ショートトリップ～

別府済学部短期大学 特任准教授 安達 美和子 / 講師 赤木萌子

【目的および内容】

大分地域の魅力を発信するには、まず発信者自身がそこで暮らすこと・働くことの楽しさや喜びを見出すことが重要である。地域住民にとっては当たり前だと感じていることが、観光客などの外から訪れる人にとってはたいへん貴重なもの(即ち観光資源)と捉えられることもある。本事業では温泉コンシェルジュコース*の授業をもとに、相手に心から地域の案内ができることをめざし、大分にある「恵み」を再発見するために、座学および体験の計3つの講座を実施した。



*「温泉コンシェルジュコース」
温泉をベースに、心と体の健康・癒しのために長期的またはリピーターとして訪れたいようなプログラムの提供と、総合的なおもてなしができる「総合案内人」を目指すコース。

大分の恵み再発見

期待される効果

- ・郷土愛の育成
- ・広報力(ロコミカ)
- ・地域資源 = 観光資源

【実施講座】

①座学「大分の癒しスポット」

大分の魅力スポットについて基礎知識を養う。

講師:公益社団法人 ツーリズムおおいた 専務理事兼事務局 長 荒川孝二 氏

日時:平成28年9月1日(木)18:30~20:00

会場:サテライトキャンパスおおいた

受講者数:32名(男性20名・女性12名)

内容:観光情報誌やテレビ等で紹介される有名観光地だけではなく、県内全域には自然を中心とした、様々な楽しみ方ができるスポットが多く存在する。体験講座に入る前の基礎講座として、「癒し」をテーマに大分県内のお勧めスポットを季節や時間に分けて、写真や動画を観ながら学んだ。



②体験「五感が喜ぶ、ショートトリップ:別府編」

まち歩きと、気軽に体験できる食(料理)を学ぶ。

講師:スパイス食堂 ケーボノス主宰 フード・アーキテクト 宮川 園 氏

日時:平成28年9月12日(月)10:00~14:00

会場:スパイス食堂ケーボノス(別府市)

受講者数:19名(男性13名・女性6名)

内容:別府温泉発祥の地と言われている浜脇が位置する別府市南部地区のまち歩きを実施。何気なく通り過ぎている場所を「人の目線」で見直すことにより、地域にある資源を再発見する。また、自身でつくったサンドイッチをみんなで食べることで、値段や形式だけではなく、「食の楽しみ方」を体験した。



③体験「五感が喜ぶ、ショートトリップ:竹田編」

温泉を予防医療(健康)に活用した取り組みを学ぶ。

講師:竹田市商工観光課 商工観光係 副主幹 森田康之 氏

日時:平成28年9月22日(祝・木)9:00~18:00

会場:長湯温泉郷(竹田市)

受講者数:21名(男性11名・女性10名)

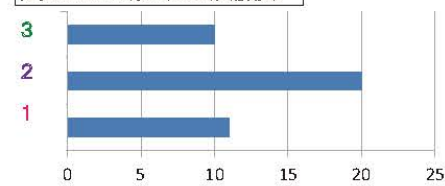
内容:特徴ある炭酸泉に注目し、予防医療の視点から積極的な温泉活用に取り組んでいる竹田市。医療機関との連携による科学的根拠を用いた温泉の効果効能についての知識や、地域の食や自然とともに温泉を楽しむ「竹田湯治」などの取り組みについて、食事や入浴、まち歩きをとおして学んだ。



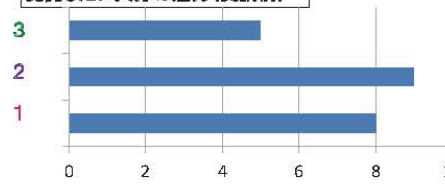
【アンケート結果】

「大分の恵み再発見」冊子より抜粋

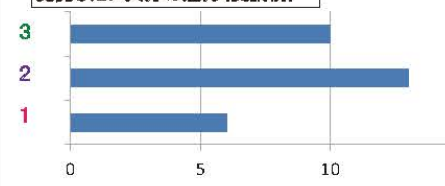
発見したい大分の魅力(受講前)



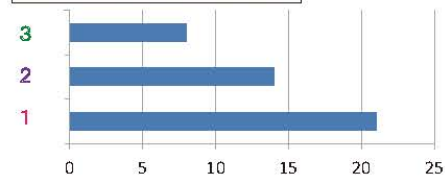
発見したい大分の魅力(受講前)



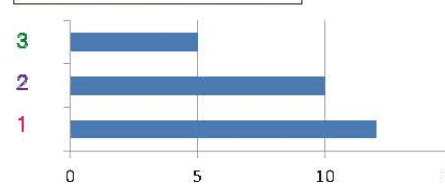
発見したい大分の魅力(受講前)



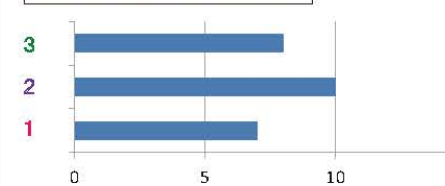
発見できた大分の魅力(受講後)



発見できた大分の魅力(受講後)



発見できた大分の魅力(受講後)



<回答項目> 複数選択可

3. 大分ならではの地域資源を活用するアイデアや工夫
2. 地域がもつ可能性
1. 新しいスポット

<回答項目> 複数選択可

3. 大分ならではの地域資源を活用するアイデアや工夫
2. 地域がもつ可能性
1. 新しいスポット

<回答項目> 複数選択可

3. 大分ならではの地域資源を活用するアイデアや工夫
2. 地域がもつ可能性
1. 新しいスポット

受講者の内訳としては約6割が男性・約4割が女性、年代としては30~40代の割合が多く、続いて60代、50代の順となった。また、普段の情報収集および情報発信においてSNSの利用があるかを調査したところ、受講者の8割が利用していると回答した。受講後のアンケートでは「受講をとおして学んだ内容を人に紹介したいか」という問いで、約9割の受講者が紹介したいと回答した。

【展望】

この事業で受講者が「大分の魅力を再発見」したことを、今後、家族や職場、友人に伝えたり共に体験することで、地域に新たな交流人口が発生し地域発展につながることを期待する。また、その地域での体験談をSNS等で発信し、各々が広告媒体となって世界に地域の「今」を情報発信することで、その投稿によって観光客が「旅の目的地」として大分地域を選択することを願う。

<おおいたプロモーションプログラム2016>

おおいた森のかおりとアロマセラピー ～精油(アロマ)の魅力と体験～

大分大学工学部 氏家誠司, アロマセラピーインストラクター 石川さやみ

Tel: 097-554-7903 / e-mail: seujiie@oita-u.ac.jp



概要

【目的】

- *おおいた県産品から得られる香り成分である木質系精油(アロマ)を中心にその基本的性質や利用方法についてわかりやすく解説する。
- *参加者に精油(アロマ)の実物を体験してもらい、その魅力や効用、利用方法についても具体的に理解してもらうことを目標とする。

【プログラム】 2016年12月18日13:30~17:00

【講義1】 13:30~14:10

1. 自然界における香り成分(天然香料)とその利用の歴史
2. 合成香料と天然香料の違い、フレグランスとフレーバーの違いについて知ってもらう

【講義2】 14:10~15:50

1. なぜ植物は香をもつのかを考え植物からの恵み精油(エッセンシャルオイル)を使うアロマセラピーのご紹介
2. 大分の森の香り(スギ、ヒノキ、クロモジ)の精油を体験し森の癒し(森林浴)のメカニズムやその効果を知ってもらう

【体験】 15:50~17:00

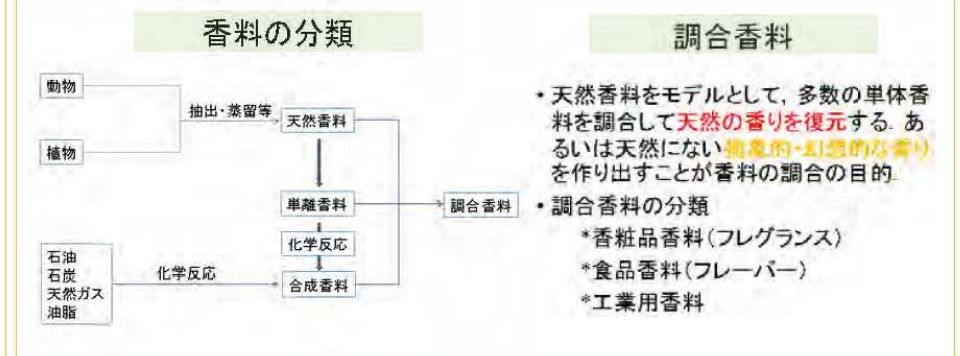
1. 各種精油を実際に扱い、その香りを認識する
2. 自分の好みの香りを精油を混合することで作る
3. 自分好みの混合精油を使って、香りジェルを作製する



事業内容

化学工業からみた香料

1. 紀元前: アレキサンドリアに香料工場
2. 香粧用香料、香花、香油の貿易: ローマからフランスへ
3. 香料植物の栽培⇒香料工業への発展
4. 日本では16世紀にシヨウノウの生産技術が中国から伝来
5. 18世紀になって近代化学工業が始まると、1860年代に化学合成によってさまざまなにおい物質が製造されるようになった。
6. 19世紀に土佐で水蒸気蒸留法によってシヨウノウ生産が発展した。
7. 第二次世界大戦後、天然シヨウノウに代わってはいっ、ラベンダー、ゼラニウムなどの生産が増えるが、石油化学工業の発展とともに合成品へ移行
8. すべての合成品で対応できるわけではない。白濁油の主成分は合成が大変なため代替品が利用される。



アロマセラピーって知ってますか?

*アロマセラピーとは

花の香り、フルーツの香り、森の香り、植物の香りは、私たちの心や身体にさまざまな働きかける。アロマセラピーは、植物から抽出した香り成分である精油(エッセンシャルオイル)を使って、心身のトラブルを穏やかに回復し、健康や美容に役立てていく自然療法である。

*アロマセラピーの源流は古代

古代から、人類は植物の香りを利用し、医療にも役立てていた。20世紀初頭「アロマセラピー」という言葉が登場し、精油やアロマセラピーの研究が進んだ現在では、美容、健康の増進、リラクゼーション、スポーツ、介護や医療、予防医学などでも活用されている。



なぜ植物は香りを持つのか?

- ・鳥や昆虫を引き寄せて、繁殖に役立てる(誘引効果)
- ・害虫、害獣を寄せ付けないようにする(忌避効果)
- ・有害な菌やカビなどから身を守る
- ・病気を傷を修復させるため
- ・生存競争の相手を妨害する
- ・他の植物とのコミュニケーションとして

フィトンチッドってなに? 「森(森林)に入ると「気持ちいい」「清々しい」と感じるのはなぜでしょう?」

樹木や草花から発散する香りの成分(揮発性物質(フィトンチッド))が森林の中にあるからです。◎フィトンチッドの語源...1930年頃にロシア生物学者ボリス・P・トーキン博士が発見・命名。【造語】フィトン(植物)・チッド(殺す)=植物を殺す(例) 刺身など生魚をわさびと一緒に食べるのは、すりおろしたわさびから放出された揮発性物質が細菌類等を死滅させるため、松の木周囲に草が生えにくい事等。◎フィトンチッドの成分... αピネン カンフェン βピネンなど これらの成分は人間にとって、免疫力(NK細胞)の向上ストレス低減、疲労の自覚症状の改善、リラックスし、ストレスホルモン(コルチゾール)の減少効果などの効果があるとされている。

★アンケート

1. アロマセラピーの本質がわかった。 2. 化学から見たアロマセラピーを学びたい。 3. 化学から地球の話・香りに関するいろいろな興味がありとても面白かった。 4. 芳香剤を作りたい。 5. アロマセラピーのことも楽しく学べ、とても知りたい有機物についての話が聞けてとても素敵な講座でした。 6. 香りを伝えることをしてみたい。 7. 大学の先生の講座を受ける機会はありませんでした。とても新鮮で楽しかったです。 8. とてもわかりやすく楽しめました。また参加したいです。 9. きょうみのある内容でもよかったです。 10. 大分県産の精油を体験できて楽しかった。勉強になりました。 11. 大分県に和声油があることを知りとても嬉しい講座でした。 12. とても楽しく、ジャンルで作りだして楽しかったです。化学と香りがつながっていることを知ることができました。アロマの香りについている効果があることもわかりとても勉強になりました。 13. 講義だけでなく、実際に作製もできて楽しかったです。 14. アロマのことも深い分野を学ぶことができた。とても勉強になりました。 15. 今、アロマアドバイザーの勉強中、もっとアロマの知識を吸収したかったので大変満足でした。

「大分の地域を元気にしている 担い手訪問バスツアー」

本事業は、地域を元気にする取り組みをCOC+事業を通してさらに活性化することを目的とし、その導入プログラムとして、まずは地域住民の方に地域を元気にしている担い手を訪問して頂き、その魅力にふれる機会を企画した。

11月23日（水祝）に実施した。大分市のホルトホールで講座の説明・参加者の自己紹介を行い、3カ所の地域を元気にしている現場を訪問した。

1カ所目は過去の優れた取り組みを訪問するという事で、竹田市の白水溜池堰堤を訪れた。昭和初期に大分県の技師小野安夫氏が設計・監督し建設されたダムで、平成11年に明治以降の近代化遺産として国の重要文化財に指定された。参加者は当時の地域づくりに貢献した地元の方の技術の高さに感銘を受けていた。



白水溜池堰堤をバックに記念撮影

2カ所目は、竹田市中心部でオステリア・パルを営み、地域でのネットワークや賑わい創出に取り組んでいる桑島孝彦氏を訪問した。オステリアを予約で借り切り、美味しいランチをいただきつつ、竹田市に戻ってきた理由、交流と賑わいを生み出す拠点としてのオステリアの運営などについて情熱あふれるお話をいただいた。参加者は、ランチのおいしさと若い世代の柔軟な感性での取り組みを感じている様子であった。



桑島氏を囲んで取り組みについて伺う



美味しいランチに舌鼓

3カ所目は、豊後大野市千歳で焼酎蔵を営まれている藤居純一郎氏を訪問した。藤居氏は常圧・減圧蒸留で製造した麦の香りあふれる麦焼酎を生産されている。地元の農家と連携して地の素材にもこだわり、蔵巡りの企画やNPO支援にも関わられるなど、地域を元気にする様々な取り組みが行われている。実は蔵の見学と焼酎の試飲をさせて頂き、地元で生まれる素晴らしい品質の焼酎に感銘を受けた。



蔵の中を巡って説明を受け



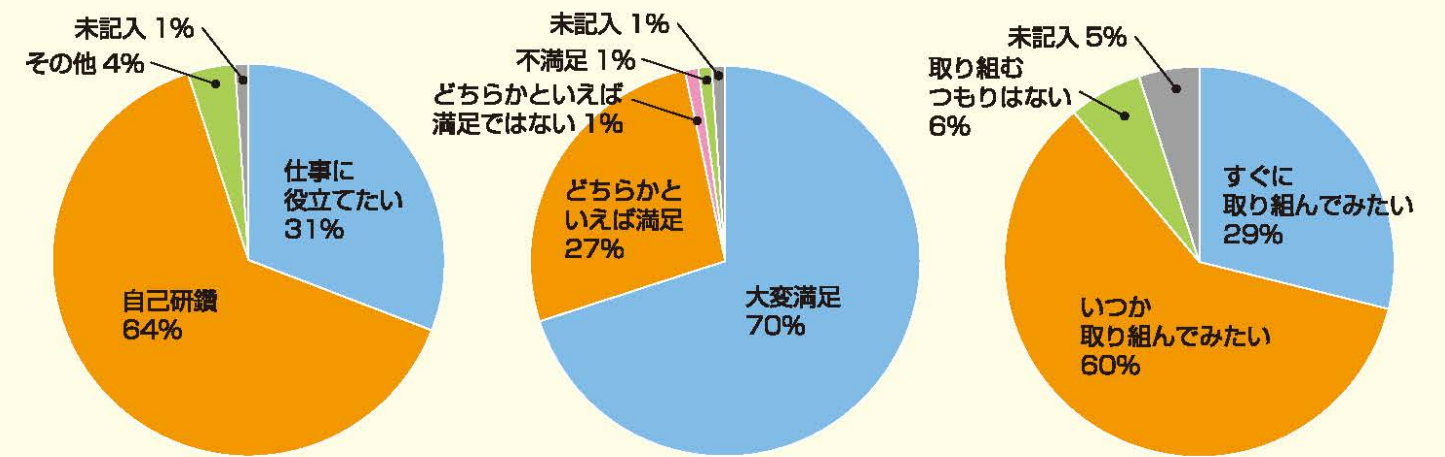
瓶詰めも丁寧な手作業で

受講者には好評で、このような魅力的人材の発掘と発信が担い手育成に効果的であることを確認できた。



大学等による「おおいた創生」推進協議会では、平成27年度の文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生事業(COC+)」で採択された「地域と企業の心に響く若者育成プログラムと大分豊じょう化プラン」と相乗して、大学等の持つ研究開発能力や学生の活力を地域社会と連携させることにより、地域の活性化・地域人材のレベルアップ・若者の地域との連携及びそれによる地域定着を推進するために2種類の支援事業を大分県から受託して実施致しました。

「おおいたプロモーションプログラム2016」参加者アンケート



来年度も「学生による地域ブラッシュアッププログラム2016」と「おおいたプロモーションプログラム2016」それぞれ、個々の大学の枠にこだわらず、地域の方と広く連携して活動することにより地方創生につながる活動を行っておりますので、大分県内地域の皆様と共に若者による地方創生を推進して参りたいと存じます。

